



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

イラン：P5+1 とイランとの核協議（5月23日、24日）

5月23と24の両日、P5+1 とイランとの協議がイラクの首都バグダードで開催されたが、合意には至らず、次回協議をモスクワで6月18、19日に開催することで一致し、2日間の日程を終えた。

23日、EUのアシュトン外務・安全保障政策上級代表（外相）が、イランのジャリーリー国家安全保障最高会議（SNSC）書記に、濃縮度20%のウラン製造停止の見返りに航空機部品の輸出規制などを一部緩和する案を新たに提示、イラン側も5項目からなる対案を示した。だが隔たりは大きく、双方が提案内容を検討し話し合いを進めるためとして、当初23日のみの予定とされていた協議の日程が延長され、24日も継続された。ただし、米国のある政府高官は、初日の協議について、かなりの意見相違が明らかになったが、一致する点もあったと述べている。

24日の協議においても、P5+1 とイランの両者ともに、相手側が先に行動を示すことを要求した。P5+1 は、ウラン濃縮の即時停止を最優先事項として要求し、その見返りとして、航空機部品などの輸出規制緩和を提案した。一方、イラン側は、核不拡散条約（NPT）の加盟国として核の平和利用の権利をまず認めるよう要求し、イランの金融機関や原油輸出部門を標的とする制裁の解除を求めた。両者間の主張の隔たりは大きく、交渉は決裂しかけたが、協議を進展させたいとして、話し合いの継続と次の日程だけは決まった。

西側は制裁圧力を維持しつつ、イラン側の譲歩を引き出そうとしているが、イラン側は、EUが7月から発動するイラン産原油の禁輸措置の延期や金融制裁の緩和などを望んでいる。だが、制裁による経済悪化に苦しむイラン側にしてみれば、20%濃縮ウラン製造の停止は重要な交渉カードであり、大幅な制裁緩和の確約が得られない以上、製造停止に応じることは不可能である。イラン学生通信（ISNA）は、イラン側からすれば、P5+1 の提案はバランスを欠いていると論じた。イラン側は、P5+1 側代表団の地位が低く、前進させるための決断ができないと批判したという。国営イラン通信（IRNA）によれば、イラン当局者はP5+1 の提案について、細部にこだわっていると発言した。ジャリーリー-SNSC 書記は、バグダードで記者会見し、ウラン濃縮はイラン国民の権利であると改めて強調している。

しかし、P5+1 は、ウラン濃縮停止が検証可能な形で行われることを求め、対イラン制裁の緩和には慎重な姿勢を見せている。EUのアシュトン代表は、2日目の協議終了後に記者会見を開き、双方が進展を望んでおり、一致できる部分があることは明らかだが、大きな相違点もまだ残っていると語った。ニュージーランドのマカリー外相との共同記者会見において、クリントン米務長官は、双方の提案には明らかに隔たりがあると述べた上で、協議を進める間も対イラン制裁の強化を続けていく方針を表明した。